

## 陶町歴史ロマン 23

### 17、日本と戦争

#### (1)兵役の開始

日本は、幕末の黒船来航以来、欧米諸国の植民地化の危機にさらされています。

明治維新の時点で、インドから日本列島にかけて



のアジア一帯は、欧米諸国の植民地にされ、されてなかったのは、タイ、清国（中国）、朝鮮半島、および日本列島だけでした。（清国は部分的に植民地化されていた）

日本では、そのような危機にいち早く反応して明治維新が起こり、さまざまな様式の近代化を急ぎました。その近代化の一つが富国強兵です。

強兵政策として、明治6年に徴兵令が發布され、国民皆兵の制度が確立し、当地方は名古屋鎮台の官区に入りました。

明治8年には最初の徴兵が行われ、水上村 歩兵1等卒 永井金九郎が名古屋鎮台歩兵第6連隊へ入営している。この人は、明治10年の西南戦役にも従軍している。

明治11年には、名古屋鎮台金沢分営の歩兵第7連隊に下記2名の入営記録がある。

猿爪村 歩兵1等卒 永井満次郎 大川村 歩兵1等卒 水野奥次郎

明治12年には、名古屋鎮台第3師団に 同年歩兵第6連隊へ3名入営の記録がある。

#### (2)日清戦争（明治27年～28年（1894年～95年））

日本は、まだ植民地化されていない清国と朝鮮の両国と同盟を結び、近代化が遅れている両国を近代化へ導き、ともに団結して欧米列強と戦うという計画をたてましたが、この計画はすぐに挫折してしまいます。

当時の中韓両国は、日本をさげすんでいました。そのため、さきがけて近代化した日本をバカにする形で、この日本による同盟の提案を拒否したのです。

これにより、日本は東アジアの団結という道に早々にあきらめ、「アジアという枠組みの意識を捨て、富国強兵を合言葉に日本一国で欧米諸国と肩を並べ、植民地支配に抵抗しよう」（この考え方を脱亜入欧という）と考えたのです。

そして、当時、大陸を南下し今にも朝鮮半島に進出してこようとしていたロシアよりも先に朝鮮半島に勢力を伸ばそうと画策します。具体的には朝鮮国内の甲午農民戦争（東学党の乱）に介入したのです。

が、当時の朝鮮は清国の属国でしたので、その日本の行動を清国が黙って見ているはず

もなく、やがてその争いが激しくなり「日清戦争」にいたったのでした。

明治27年6月に朝鮮派兵を決定し、先頭の部隊が仁川に到着し、その後京城（現ソウル）を占拠し8月1日に清国に対し宣戦布告、戦争に突入します。維新により近代化された日本軍は、近代軍としての体をなしていなかった清軍に対し、終始優勢に戦局を進め、遼東半島などを占領した

翌年4月17日、下関で日清講和条約が調印され、戦勝した日本は清から領土（遼東半島・台湾・澎湖列島）と多額の賠償金などを得ることになった。

戦時経済について財界の重鎮「渋沢栄一」（日本資本主義の父といわれ、理化学研究所の創設者）は、『開戦当初の予想では戦費調達のため金詰りが甚だしく、どの商売も不景気になるので低姿勢をとった。ところが戦争が進むと不景気どころか、むしろ好景気であった。』と回顧している。

もともと世間では、清との開戦が困惑と緊張をもって迎えられた。なぜなら、歴史的に中国を崇めても、見下すような感覚がなかったからである。日清戦争の勃発に戸惑う国民も少なくなかった。しかし、勝利の報が次々に届くと、国内は大いに沸き、戦勝祝賀会などが頻繁に行われ、「帝国万歳」が流行語になった。戦後の凱旋行事も盛んであり、しばらくすると各地に記念碑が建てられた。戦時中、男児の遊びが戦争一色となり、少年雑誌に戦争情報があふれ、児童が清国人に小石を投げる事件も起こった。ただし、陸奥宗光のように、コントロールの難しい好戦的愛国主義（排外主義）を危ぶむ為政者もいた。

明治28年には陶村から出征した日清戦争の従軍者は幸いに一人の落後者もなく無事凱旋した。各村に立派な従軍記念碑があることから、村としてもこの出征が一大事であったことが分かります。



猿爪村 日清戦争従軍記念碑



水上村 日清戦争従軍記念碑



大川村 日清戦争従軍記念碑

猿爪村 砲兵大尉 永井啓次郎（永井園次郎の実弟）  
輜重（しちょう…前線での補給部隊）兵

軍曹 永井孫太郎（曾根庄兵衛の二男） 他 3 名

水上村 3 名 大川村 3 名

猿爪村・水上村・大川村からも、応召兵数 11 名で全員凱旋の記録があります。

### (3)日露戦争（明治 37 年～38 年（1904 年～05 年））

日清戦争に勝利した日本は遼東半島を譲り受けていましたが、ロシア・ドイツ・フランスの三国干渉（明治 28 年（1895 年））により遼東半島を清に返すことになりました。

その後の清は、欧米列強国というわれる国々に次々と侵略を許すこととなります。清が日本に負けたことにより、「清は大国、眠れる森の獅子だと思っていたのに、な～んだ、清ってそんなに強くないではないか」とバレてしまったのです。各国が競うようにして中国進出を加速し、ロシアは日本から返させた遼東半島の一部を租借していますし、ドイツ、イギリス、フランスも各地域を租借しまくっていきます。

ロシアは満州（中国の東北部）を事実上占領し、さらに南下政策を推し進めようという動きを見せていました。日本は朝鮮半島を防衛の生命線と考えていましたからロシアを非常に危険視していました。

そんな時、当時世界最強と言われたイギリスも清に多くの租借地を持っていましたから、このロシアの勢力拡大を危険視していました。そこで、日本はイギリスと手を結んでロシアに対抗しようとしていました。日英同盟（明治 35 年（1902 年））の締結です。

日英同盟の内容を知ったロシアは、一部の兵を一旦引き上げさせますが、結局、南下政策を続行するロシアを危険とみなした日本は遂にロシアとの戦争を決意するのです。

国力では日本の 10 倍もの差があるロシア。この大国に日本が勝てるのか？日本側の作戦としては、お金もないし短期決戦、そして早期の段階でロシアに圧勝し講和を結んでしまおうという作戦です。



日本の国力で大国ロシアに対抗するため、国内への統制は厳しく銃後体制（兵力としてとられた男性に代わり、女性・子供を生産力として機能させる体制）の強化、貯蓄の奨励・国債募集（各村に割り当て）、軍需物資（玄米・大麦

など）の供出など国民には耐乏生活を強制しました。

陶村でも、明治 37 年 5 月には第 1 動員令がくだり 4 名が兵役に向っています。6 月には第 2 動員令がくだり 3 名が出発し、その後明治 38 年 9 月までにのべ 41 人を応召されました。その都度、盛大な歓送会が催され、小里まで、または瑞浪駅まで見送りしました。

陶の村民は出征兵士の歓送迎会はもとより、留守宅の慰安、戦病死者の葬儀、軍需品の調達、慰問袋の寄贈、国債の応募等あらゆる後援の本務に服し、みじんも出征者に後顧の患いなからしめんと努めました。

明治 37 年（1904 年）ついに開戦、前記の作戦は、ほぼ作戦通りに進行し、陸軍大将 乃木稀典（のぎ まれすけ）の多大な犠牲を出しながらも 203 高地攻略、東郷平八郎（とうごう へいはちろう）の連合艦隊によるバルチック艦隊撃破とロシアを追い詰めました。

但し、この段階で国家予算が 2 億 5 千万円の国が用意した 18 億円のうち、第一ラウンドで 15 億円も使ってしまったっていました。後はなるべく早く講和条約を結ぶことと、アメリカ大統領の仲介を頼み交渉を進めます。

この交渉は難航しました。ロシアは負けを認めないのです。といっても日本もこれ以上戦えない。19 か月の戦争期間中に戦費 17 億円を投入、戦費のほとんどは戦時国債によって調達し、また当時の日本軍の常備兵力 20 万人に対して総動員兵力は 109 万人に達したことなどから、国内産業の稼働が低下し経済的にも疲弊するなど国力の消耗が激しかったのです。そこで日本が最大限譲って、「お金はいらないよ。その代わりに、日本の韓国における優越権や南満州鉄道の一部、あと南樺太をくれ！」と要求。何とか、この妥協案で交渉は成立します。こうして日本とロシアは 1905 年 9 月 5 日に締結されたポーツマス条約により講和しました。

日本はこの戦争の勝利でロシア帝国の南下を抑えることに成功し、加えて戦後に日露協約が成立したことで日露関係は急速に改善し、大正 6 年（1917 年）のロシア革命によりロシア帝国が崩壊するまでその信頼関係は維持された。

こうして、日本は最大の目標は達成した。しかし、国民の多くはロシアに勝利したものの日本もその国力が戦争により疲弊しきっていたという実情を知らされず、相次ぐ勝利によってロシアが簡単に屈服したかのように錯覚した反動から、国民の不満は大きく反政府運動が激化したが、当時列強諸国からも恐れられていた大国であるロシアに勝利したことは、同盟国のイギリスやアメリカ、フランスやドイツなどの列強諸国の日本に対する評価



大川にある日露戦争従軍記念碑

を高め、明治維新以来の課題であった不平等条約改正の達成に大きく寄与したのみならず、非白人国として唯一列強諸国の仲間入りをし、後には「五大国」の一角をも占めることとなった。

陶村でも、この戦争に応召された 41 名に現役兵を含めて 51 人がこの戦争に携わりました。

年代別内訳は左表の通りで、人生これからの若者が数多く応召されています。

旅順にて戦死 4 名 関東州にて戦死 4 名 他に病死 2 名で 10 名の命は帰ることはありませんでした。

明治 38 年 1 月 旅順にて戦死した陸軍歩兵 永井角次郎 (21 才) の遺骨帰還に際しては、「遺骨を小里まで奉迎、水川学校運動場の葬儀には 1,000 名が参列した。」との記録があります。参列者 1,000 名は、軍関係者・近隣の行政役人・教育関係者などのみならず当時の陶村のほとんどの人が参列した (当時の陶村人口は二千人弱と思われる) こととなります。村長以下、村人は最大限の対応をしたのです。他の戦死者も同様な対応だったと思われます。

戦後、41 名が無事凱旋し熱狂的歓迎を受けました。私の祖父 河野金吾も無事帰還し砲兵 1 等卒で勲 8 等の榮譽を受けています。

明治 44 年に桜ヶ丘公園に陸軍大将 乃木稀典の書による「明治三十七八年戦役記念碑」が建之されている。右の写真。

この記念碑の建之にあたっては、大きな記念碑と小さな忠魂碑の二つの建立計画があり、乃木將軍にお伺いしたところ、將軍より「先の戦争の勝利は、天皇閣下と共に忠勇義烈な兵士の賜である。碑に差をつけるのは、戦死者に対し不敬極まりない。したがって、記念碑の一面のみ記し返すなり。」と將軍自筆の怒りの返答があったという曰くつきの碑である。

ただ、この書を見た村の所員は、くず籠に投じて平然としていたという。後に、この書を発見した永井園次郎村長は、直ちに装填を命じ、永遠に保存することにしたという。この書は、現在市役所に保管されているそうです。

建立時の村長は永井孫太郎で、石碑の裏側には陶村からの従軍者 41 名の氏名が記されている。

忠魂碑は 23 年後の昭和 7 年に陸軍大将鈴木荘六の題字による青銅製砲弾型の立派なもの

陶から日露戦争従軍者の年代別内訳

|        |     |
|--------|-----|
| 20~24才 | 33人 |
| 25~29才 | 7人  |
| 30~34才 | 6人  |
| 35才以上  | 5人  |
| 計      | 51人 |



日露戦争の記念碑

が建設されたとそうです。

#### (4) 軍事大国 日本

日露戦争に勝利した（明治 38 年（1905 年））日本は、欧米列強の仲間入りを果たし、以降、拡大路線で諸外国と衝突を重ねながら昭和 20 年の敗戦まで軍事大国の道を突き進みました。

以下に主な戦争関連事項を記します。

明治 43 年（1910 年） 韓国併合

以降 太平洋戦争終結の 1945 年まで朝鮮は日本の植民地でした。

大正 3 年（1914 年） 第 1 次世界大戦参戦

ドイツ帝国の租借地であった中国青島（チンタオ）攻略し、中国進出を更に進めた。

ドイツ帝国の植民地だった太平洋の南洋諸島を占領し、南洋の利権を取得した。

大正 7 年（1918 年） シベリア出兵（ロシア皇帝派支援）

1925 年の日ソ基本条約締結によりシベリア出兵は終了した。

昭和 6 年（1931 年） 満州事変勃発

関東軍参謀らが奉天郊外柳条湖の満鉄線路を爆破。

関東軍は「自衛」として軍事行動を開始、奉天、長春など満鉄沿線の諸都市を占領。

昭和 7 年（1932 年） 満州国建国を宣言

昭和 12 年（1937 年） 日中戦争勃発

蘆溝橋で日中両軍が衝突、現地で停戦協定が成立後、日本軍は覆して華北派兵した。

日本軍は華北で総攻撃開始し、8 年間にわたる日中全面戦争へと突入した。

昭和 16 年（1941 年） 太平洋戦争始まる

12 月 1 日、御前会議で英米オランダに開戦を決定し、

7 日に英米オランダに宣戦布告し、ハワイ真珠湾を空襲した。

1939 年に始まっていた第 2 次世界大戦は地球的規模に拡大した。

昭和 20 年（1945 年） 日本 無条件降伏

8 月 15 日 天皇はポツダム宣言を受け入れ無条件降伏をした。

日本の領土であった満州・台湾・朝鮮・南洋諸島・南樺太・千島列島を失う。

#### (5) 太平洋戦争

日露戦争後について多くは記さなかったが、特に敗戦に至った太平洋戦争の悲惨さは周知のとおりである。

○陶町の忠魂碑

昭和 23 年 現在の陶児童館北の丘陵に建設された。次ページの写真。

私が子供のころには、右の写真にある建屋の部分はなかったと思うが…。おそらく遺品が収めるよう後に建てられたものだと思います。



#### ○瑞浪市日中不再戦の誓い

戦争末期の昭和 19 年 瑞浪市明世町（通称化石山）に、米軍による空襲を避けるため、強制連行した中国人らによって地下工場建設を目的に全長 8km 地下壕が掘られました。この地下壕が川崎航空機の疎開地下工場跡で、現在は「地球回廊」として平和利用されています。

地下工場が完成すれば、陸軍の四式重爆撃機「飛龍」を月 60 機生産する予定であったが、完成前に終戦を迎えた。

中国人労働者に対する待遇は劣悪、労働は過酷で、4ヶ月間に 39 人（330 人中）が命を落としました。戦後、地元の人々によって 39 名の殉難者の氏名を刻んだ「日中不再戦の誓い」の碑が建立されました。



地元では、毎年 9 月 18 日に近い休日に、殉難者供養の法要がおこなわれている。

私が陶小学校 5 年の時の担任である加藤明先生は、戦時中、名古屋から瑞浪の祖父母宅に学童疎開していて、自宅の畑近くに中国人の強制収容所があり、大勢の姿を見たという。

ボロボロの服を着た中国人の多くは疲れ果てた表情で腰を曲げ、はうようにして作業に向かい、工事現場では過酷な労働と栄養失調により動けなくなった中国人が棒でたたかれるのも目撃したそうです。

ある日、へそ山で煙が上がった。近づくと死亡した中国人が戸板に寝かせられ、焼かれていた。「小学生の時に見たあの時の臭いと光景は絶対忘れません。」と加藤さんは涙ながらに語ります。大人のまねをして過酷な労働に従事した中国人や朝鮮人を馬鹿にした自分の子供時代を猛省しているといいます。

教員を早期退職後（58 歳）、教員仲間と県地下壕研究会を作り、死亡した中国人の死亡診

断書を探したり、当時を知る人を訪ねて聞き取り調査をした。まとめた書物は10冊以上になるという。

現在、釜戸町に住み、自宅近くにある約1.2kmの地下壕では案内役を努め、次世代に戦争の現実を伝えている。

右の写真は、愛知県立大3年白木諒さん(21)＝愛知県一宮市が、戦時下の強制労働をテーマにした卒業論文を書くため、大学の先輩の紹介で釜戸の地下壕を訪れた時のもので、2016年3月6日付の中日新聞は、その時の様子を『加藤さんによると、地下壕には7カ所の入り口があり、いくつもの坑道が掘られている。全長は1.2キロほどで、1200人もの朝鮮人労働者が1945(昭和20)年2、3月ごろから8月にかけて掘ったという。加藤さん



は掘りかけの壁や残土、労働者が刻み込んだとみられる「金」「山」などの文字について説明した。白木さんは「文字がくっきり残っているのを見て驚いた。自分が掘ったという証しを残そうとしたのかな」と思いをはせた。』と記しています。